
麝香人形堂

鮎塩

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

麝香人形堂

【Nコード】

N9692E

【作者名】

鮎塩

【あらすじ】

神山『須彌山』の頂上に建造された空中都市のすみっこで、ひっそりと営業する『麝香人形堂』。その店主である少女の下に、今日も人間やら妖怪やらが何かしら厄介ことを連れてくる。物憂げな人形師の少女と、謎の多いお人好しの青年。彼らが出会い、小さな物語がのんびりと始まった。

01 巡る縁、そして少女は出会う

すべては崩れ落ちてしまった。

紅く、黒く、理不尽に。

物も、者も、形無き物も、それは区別無く朱に染めて、平等に死へとくべていった。

穏やかな時の流れた二人の部屋も。

大切な君も。

思い出さえも。

本来住まうべき大地の上であるなら、いつか焼け落ちたそこに新たな命が芽吹いただろうか。

積もる灰すらその身の糧に、荒れた大地をその葉で押し上げ、命は巡っていったのだろうか。

ああ。

ああ。

自分の一部を失うことが、こんなにも空虚なことなのだと、初めて知った。

指先を動かすことすら億劫だけど、それでも約束をしたのだから。君との最後の約束なのだから。

たったひとつだけのこった、たいせつなひとかけらを　だいじに
だいじに　にぎりしめて。

約束は守るよ。
生きていくよ。
幸せになるよ。

だから　　ありがとう。

きみに会えてよかった。

第1話　　巡る縁、^{えにし}そして少女は出逢う

その惑星^{ほし}は無垢な白雲でその身を隠していた。
その雲海は上を歩けるのではないかと錯覚させるほど濃厚で、どこ
から見ようともし切れ目一つ見つからない。一見すると雪玉のような
惑星である。

そして何より目を惹くのは、その分厚い雲の殻を突き破って聳えたつ巨大な山。

標高を測るのも馬鹿らしいほど遙か天空に頂^{いただき}が見える。

山はまるでその星ただ一人の住人とも言うように、我が物顔で毛足の長い真白^{ましろ}の絨毯にゆったりと胡坐をかいている。

それはただただ雄大で、どこまでも孤独な光景だった。

畏怖すら覚えるその雄姿から、いつしか神山　『須彌山^{しゅみせん}』とまで呼ばれ、敬われるようになっていた。

そしてその孤独な神様は、頭上に蒼き冠を戴いている。

それは明らかな人工物でありながら、あまりにも自然に山と一体化していて、創世のころから存在していたのではないかと思わせる。

その幾重にも層を積み上げた建造物^{かんむり}は内部に人の営みを抱いている。

それこそが空中都市『トウリ天』。

^{ありづか}蟻塚を思い起こされる、人口20万人弱の超高高度に位置する積層型都市である。

その外壁は青空に溶け込むほどにひたすら蒼く、その周囲をいくつもの小さな　あくまでも山と比較して小さな　気圧や酸素濃度などの調整用結界機が、小鳥のように飛び回っている。

都市暦1356年。

すべての始まりは、第10層の亜細亜^{アジア}系地区、とある小さなお店から。

『麝香人形堂』
じやうじんぎやう

そう堂々と書かれた看板は、少々年季の入った風情で瓦の上に掲げられていた。いちいち直すのも面倒くさいと言いたげに若干傾いてる。

無国籍というより多国籍、洋風でも和風でも中華風でもあり、またどれでもないような小さなお店。

これまた少々年季の入った両開きの扉には、『営業中』『人形制作』『慰霊も承ります』とぞんざいに記された札が適当に貼り付けられていて、どうにもやる気は見えない。

その札に気づかなければ閉店していると素通りしてしまいそうだった。

あらゆるところから店主の投げやりさが伝わってくる立派な店構えである。

しかしよくよく観察すれば、どこもかしこも掃除が行き届き、古くはあるものの埃一つ見当たらない事に気づく。おそらく従業員か誰かの努力の賜物だ。
少なくとも同一人物の仕業ではない。

そこまで無意識に分析をしてから、青年はようやくと店の扉に手をかける。

からら、と青年がふすま開きの扉を滑らせると、内側に取り付けられていた小さな鈴が店構えに似合わぬかわいらしい音で来客を知らせる。

「いらっしやいまし」

鈴の音に負けない可憐な声が青年を迎える。その声の持ち主は、蓮の花のように幽玄な容姿の女性だった。

純白のフリルと深い青紫で構成されたロング丈の女給服。^{メイド}
ゆるやかにウェーブを描く薄紫の髪に、優しげに細められた水色の瞳。

長く上がった耳の先端はほのかに桃色に染まっていて、左頬の泣きボクロが彼女の清楚な美しさに色香を添えている。

この人が几帳面に清掃をしている従業員だろうか。

「あのー、ここが麝香人形堂です…………… か……………」

「ええ。間違いないかと」

「…………… え、と」

店内を直視してしまった青年は思わず言葉に悶え、従業員らしき人はその反応も当たり前だと静かに微笑む。

店内は人形で溢れていることは想像の範囲内であつたが、さすがに視界を埋めるほどのものとは思わなかったのだ。

商品棚どころか壁中にも当たり前に、それでも足りずに天井からも所狭しと人形が吊り下げられている様に眩暈を起こしそうである。

この中に死体が紛れていたとしても気づけやしまい。

まさに圧巻の…………… 圧巻の…………… だめだ、形容できない。

等身大のものから妖精のように小さなもの、未完成なのか素体のままのもの、中には頭部だけ・足だけ、といった部品のみが垂れ下がっているものまである。

人形の暗幕に遮られて店の奥は伺えない。

「ではこちらへどうぞ。お茶をお出しいたしますね」

「あ、はい。ありがとうございます」

初見の客の戸惑いなど慣れたものなのか、女性は暖簾をくぐる様に人形を掻き分け、青年を奥へと誘導する。

人形の印象があまりにも強すぎて今まで意識していなかったが、彼女の進む先から微かに甘い香りが漂ってくる。これも店名通りの香が焚き染められているのだろう。

本来の麝香よりも優しく感じられるこの香りはホワイトムスクだろうか。

店内はそれほど広くはないため、すぐに視界は開ける。

入り口よりは人形が少なく　よくあれで客がウターンしないものだ　少し余裕のあるスペースに、瀟洒な拵えのカウンターが陣取っている。

そこで一人の少女が、気だるげに文庫本をめくっていた。

「ああ、いらつしやい」

青年に気づいた少女は顔を上げる。

女の子にしてはかなり短い象牙の髪と、無機質な光を宿すエメラルドの如く美しい瞳。

長い銀鎖ぎんさの付いたモノクルを小さな鼻にひっかけ、漆黒のレースで編まれた長手袋で色素の薄い肌を際立たせている。

将来が期待される掛け値なしの美少女である。

彼女が微笑めばこの『お化け屋敷』も少しは和む　　かどうかは微妙なところだが、そもそも少女はニコリともしない。

案内をしてくれた女性はにこやかに「お客様です」とだけ少女に告げ、奥の廊下へと消えていった。

青年はそれを何とはなしに見送ってから少女に視線を戻す。

「えっと、こんにちは。貴方がここの店主さんですね？」

「　　うん？そうさね。見てのとおりさ」

やはり少女はにこりともしない。商売人としてはよろしくないことに、彼女の愛想は決してよくは無いようだ。

「先ほどの女性は」

「ああ、彼女はうちの唯一の店員さ。よく気のつく子だよ」

少女はほんのわずかに眼を細める。

それはよっぽど注意していないと分からない微細な表情の変化だったが、それが彼女の微笑みなのだと青年は正確に読み取った。彼は観察力には自信があるのだ。

しかし少女はどう見ようと先ほどの女性よりも幼く、鯖をよんでもせいぜい15歳ほどの容姿である。が、青年は彼女が店主であることに疑問を抱いている様子は無い。

このトウリ天において、外見年齢などなんの役にも立たないのだから。

「私はルナ。人形師でもあり慰霊師でもある。人形のオーダーメイドから既製品の取り寄せ、慰霊であるなら徐霊から浄霊まで、どんな要望にもだいたい応えましょう」

と、どうにも決まらない口上を述べる少女　ルナはそこでやっと、古びた文庫本をパタリと閉じる。やはり営業スマイルなど浮かべる気配は無い。

しかしそれでも不快感がないのは、素っ気無くはあってもその態度に棘は混じっていないからだ。

彼女は無造作に本を棚に押しこんで、カウンターに片肘をついて頭を支える。

……棘はないのだがやる気も見えない。

一方、青年は怒る風でもなく、「はあ」と興味深げに頷いただけだった。

「それで、人形？慰霊？ああ、両方ってのもあるかね。いったい何を求めだい、お兄さん」

「それは」

青年はルナの物憂げな瞳を見つめて、何かを確かめるように間を置いた。

青年の鈍い金色の瞳に様々な感情が瞬いては消えるが、その意味を彼女に知る術はなく、また探るつもりも毛頭無い。彼の眼には悪意も害意もなく、ただ静かな深慮の色があるだけであったから。彼女の傍らの香炉から、ゆっくりと細い煙が立ち上っていく。

やがて彼は人の好い微笑^{えみ}を浮かべて言った。

「どちらでも、ありませんよ」

は？とルナが驚いて聞き返す。観察するまでもなく、目を点にしているのが丸分かりだ。

青年はごく自然な動作で、ルナへと頭を下げる。

「私の名は六神丸ろくじんまると申します。今日はルナさんにお願いがあつて参りました」

と、いうことは。

「アンタまさか冷やかし？」

「えっ、いえいえ！そんなつもりはありません」

胡乱な目つきをするルナに、六神丸はあわあわと否定する。

彼はその形のいい眉を八の字にして、じっと見つめてくる店主から眼を逸らさずに続ける。

「ただ……弟子にしていただきたいと思ひまして」

「へえ。弟子に」

「はい。弟子に」

「………弟子？」

「はい。弟子です」

「………あらあら、まあ。どうしましたの？」

奥から戻ってきた女性が、茶器を手に首をかしげた。

+

麝香人形堂にはそう頻繁に客は来ない。どちらかというと閑古鳥が

喧しいぐらいだ。

そんな店にひさしぶりの客が来たかと思えば その客は客ではなかったのだ。

弟子入り志願、なぞ開店して以来の珍事ではなからうか。

予想の斜め上を変化球がかつ飛んでいったのだから、思わず思考停止してしまったところで店主 ルナに非は無いはずだ。

「つまりですね。人形師であり慰霊師であるルナさんに、いろいろと指導していただきたいのです」

「あー、ちよつと待つて………」

ルナは手で台詞を遮り、頭痛をこらえるように額を押さえる。

目の前の彼 六神丸は、人形の森にも慣れて本来の調子を取り戻したようで、行儀よく椅子に腰掛けて紅茶を楽しむ彼は、自室にいるようにくつろいでいる。

椅子は話が長くなりそうだと店員が用意した。

「弟子入りねえ………弟子入りつてあの弟子入り？」

「はい。文字通りそのまま何の婉曲でもなく、ルナさんの想像なさっている弟子入りで合っていると思いますよ」

「ああそう………」

六神丸とは初対面 のはずだ。ルナはここ100年の記憶を探してみるが、思い当たる節は無い。

ルナの対面で、彼はのんびり返事を待っている。

待つ時間も楽しいというのか、彼はにこにこ微笑みを絶やさない。愛想笑いでは無い証拠に、その微笑みには幸せを伝染させる不思議な体温がある。

だがそれもこの状況では脱力する効果しかもたらさない。

「何でって聞いていいかい？ 自慢じゃないけどあたしゃ、人形師としても慰霊師としても、全然、まったく！ 有名なんかじゃないってのにさ」

「おや、それは謙遜というものですよ。あ、このお茶とってもおいしいですね。ええと」

「恋々（れんれん）ですわ。お好きなようにお呼びになってくださいな」

唯一の店員　恋々はふわりと他者を魅了する笑みを浮かべる。
青年とは違い、こちらは穏やかさの中にも儚さの同居する微笑だ。

「……………聞いているのかい」

「あ、すみません。……………あれ、何でしたっけ」

「……………はあ……………」

ルナはそんな彼を前に頭を抱えた。ため息も出ようというものである。

（見た目はまともそうなのに、物好きな奴もいたもんだ）

この青年、六神丸は今まで会った事の無いタイプの人間だった。

微笑を絶やさないとあたりは恋々も同じだが、彼女のあれはただの無表情と同じだ。感情に関わらず常に微笑んでいるのだからある意味性質が悪い。
たち

人間……………、いや、彼はおそらく人間ではないだろう。

ルナとさほど変わらない長さの青氷の髪も、せいひょう穏やかな光を灯す褪せた金の瞳も、人の持ち得る色彩ではない。

「恋々、どう思う？」

「そうですね……育ちはよさそうですね、下品な裏の目的があるようにも見えませんか。一応うそは無いと思いますよ?」

「そうだねえ……もしかしなくとも上層出身のぼんぼんかね」

ルナは傍に控える恋々と小声で意思を交わす。

こちらの言葉は聞こえているだろうに、六神丸は気にも留めず、彼を包囲する人形たちを面白そうに眺めている。

彼を簡単に言い表すならば『とても綺麗な青年』、だろう。

顔の造りもそうだが、それだけではなく一挙一動　つまり全体において綺麗なのだ。

例えばカップを口に運ぶ手つき一つをとってみても、非常に落ち着いていて上品な所作なのである。そこから上層階の出身かもしれないと見当をつけた。

上層階とは第25層よりも上のことを指し、基本的に金や地位のありあまる者達が暮らしている。

あくまで『出身』なのは、身に着けているものがそこの量販店で都合が付くようなものだったからだ。夜空のように深い紺と白の着物は彼に似合っているが、そう高そうな生地ではない。

カモにされないために着替えてきたのかもしれないが、この呑気な青年にそこまでの考えがあるのかどうか。

「ねえあんた　六神丸、さん」

「呼び捨てで構いませんよ。長いので呼びにくいでしょう」

「そりゃ助かる。じゃあ六神丸、あたしゃ前にあんたと会ったことがあるのかい?」

「どうしてです?」

「……あたしにゃ、ここ百年の記憶しかなくてね。自分じゃ初対面かどうかは分かんないのさ」

ルナはとんでもないことをサラリと告げるが、六神丸は首を傾げただけだった。そして立ったままの恋々を見上げる。

「貴方が把握しておいででは？」

「わたくしが主様と出会ったのは、50年ほど前のことでしたから」
マスター
「なるほど。……………いえ、ルナさんにお会いするのは初めてですよ？」

六神丸はまたルナに首を戻す。ルナは早くも会話に疲れてきた。

「あのね……………。本当にあんた、よく分かんないねえ。会ったこともない、店に来たのも初めて。それでなんで弟子入りしたいなんて話になるんだい」

「うちは特に宣伝も出していませんしね。……………六神丸さん、そもそもどこでこの店のことを？」

「あ、はい。それはですね」

恋々の当然の疑問に、六神丸は一つ頷き、しかしすぐには答えず紅茶を一口含む。少女もマイペースであるが、この青年も結構マイペースである。

その間にルナは疲れを癒そうと、手元の紅茶に砂糖をやたらと追加してかき混ぜる。

それを見て、恋々の長い耳がピクリと動く。本当はストレートで風味を楽しんでほしいのだ。

喉を潤した青年は、周りに聞かれるのを憚るかのように、何故か声を潜めて続けた。

「……………そのですね……………実は、師匠に薦められまして……………」

……」

「あんたの？」

「ルナさんの」

ルナのティースプーンの動きが止まる。

「……………その一言で、簡単に説明がついたんじゃないかい」

「いえそれが……………くれぐれも自分の紹介というのは伏せて置いてくれ、と言い含められていまして。できれば聞かなかったことにして頂けると助かります。というかお願いします」

「あーうん。よく分かったよ。……………すまないね」

「まあ主様、^{マスター}すごい青筋」

六神丸の先ほどの紅茶を飲む間は、どうやら逡巡から来たものだったようで、彼の説明は苦笑気味だった。

ルナはスプーンを曲げんばかりに握り締める。この会話疲れの半ばあの『俺様男』のせいか、と記憶の中の偉そうな男を睨みつけた。ルナの慰霊においての師である黒麗星。^{ヘイリーシン}とある占い館を営む男である。

「なるほどねえ……………^{ヘイリーシン}黒麗星の薦めかい。あの男は何を考えているんだか」

「はい、色々とすごい人でした……………それはもういろいろと」

六神丸がこころなしに遠い目で呟く。

「でもよかったじゃないですか主様。^{マスター}少なくとも彼の身元は、^{ヘイ}黒様が保証してくださるか」と

「……………まあ、そうだがね」

人格はともかく、人としてはまっとうなので、危険人物を送り込んでくることはあるまいとルナも思う。黒麗星をその点では信用している。

さて、こうなると問題はルナに弟子をとるつもりがあるかどうか、という一点のみである。

「まあ、疑問も解決されたことだしね。お帰り願えるかい、六神丸」
「……弟子、駄目ですか？」

「駄目」
「お暇な時に教えてくださるだけでもいいんです」
「駄目」

「ええと……お店、どんな雑務でもお手伝いしますよ？」
「手は足りてるよ」

「……」
「……そんな目で見ても駄目なもんは駄目。却下」
「お願いします、ルナさん」

うー、と六神丸は今にも泣きそうな目でルナに手を合わせる。意外に食い下がって見せる彼に、ルナはいぶかしむ視線で返す。

「……あんだ、なんだってそんなに必死なんだい？いくら黒麗星の紹介だったって、他にも探せば弟子を取ってくれるところなんて沢山あるだろうに。それか専門学校に通うとか」
「それは……」

見るからにしゅんとする六神丸。へにやりと下がる犬耳と悲しそうに揺れる尻尾が見えるようだ。
ルナは甘くなりすぎて別の何かに進化した紅茶（だったもの）を喉に流し込んで、空になったそれを恋々に押し付け、なんと答えようか迷う風の青年に問いかける。

「……………あんたはどうして人形師になりたい。慰霊師になりたい」

すると青年はルナをしばし見つめ　　ゆっくりと首を横にふる。

「本当は、それらに特別なりたい訳ではないんです。いえ、正確にはそれらだけになりたい訳ではないんです」

「……………どうということだい？」

「色々なものになりたいです。あらゆることに挑みたいのです。時間だけはいくらでもあるのだから、自分にできる限りの体験を詰め込みたい。……………ルナさんの弟子になることが、私の最初の一步と決めているんです」

そう言つて六神丸は、照れくささや他の何かを誤魔化すように笑つた。

どうにも彼の話は迂遠だ。直接的な回答をあえて避けているような、掴みどころのない雲のような話し方。

結局彼は『どうして』弟子になりたいのかとは話しても、どうして『ルナの』弟子になりたいのかは暈したままである。

が、もう何となく、ルナには理由が推測できた。ため息が出る。

「……………いろんな事がしたい。そう言つたあんたに、黒麗星が何を頼んだのか当てようか」

青年は笑顔のままギクリとする。

「『あいつはずっと引き籠もったままだろうから、ちょうどいい機会だ。弟子でもとれば否応なしに世界が広がるだろ。紹介してやるからあいつを引っ張りまわしてやってくれや』」

「わあ、すごいですねルナさん。一言一句そのままです」

「あらまあ。人形制作はともかく、慰霊の仕事は座学だけではどうにもなりませんからねえ」

六神丸は隠すのを諦めたのか、申し訳なさそうに微笑んで付け足す。

「あと、ルナさんはお節介を嫌うから、俺の意図は伏せて置けよ、と続きました」

「あんだお人好しそうだしねえ。頼めば断らないと踏んだんだろうよ、あの男は」

「あ、あはは……………」

「主様、いいじゃないですか。弟子をお取りになったらいかがです」
「恋々さん！」

思わぬ味方を得て、六神丸は嬉しそうに恋々を見上げる。

彼女が主人の意向に口を出すなど滅多にないことであり、ルナは一瞬何を言われたのか分からなかった。

「何だい、恋々。あんだにしちゃ珍しい」

「だって主様^{マスター}。吸血鬼じゃないんですから、たまにはちゃんとした生活を送っていただきたいです。最近本当に外出していないじゃありませんか」

「……………むう」

「あ、新しくお茶を淹れ直してきますね」

恋々はにっこりと微笑んで、言うだけ言うと部屋から出て行ってしまった。

従者に窘められた主は横目で、人形の隙間からわずかに覗く小さな明り取りを伺う。

小窓の向こうでは、層の天井に投影された擬似太陽がこちらを手招

いていることだろう。

ルナはダルそうにカウンターに両肘をついて、組んだ手の甲に顎を乗せる。その体制のまま、正面の六神丸に問いかける。

「……………六神丸」

「は、はい」

期待に目を輝かせる青年と、面倒なことになったと顔に書いてある少女は実に対照的である。

「あんた、今んと何が出来る」

「今のところ……………ですか。料理を一通りと、あ、特にお菓子作りが得意ですね」

「……………そこはどうでもいい」

「うわルナさん目が怖いです！さっきのは冗談ですから！え、えつ

フリーデータアーカイブ

と、あと暇に任せて中央大図書館を漁っていたことがありましたので、人形制作や慰霊の方法も、知識だけなら一応あります」

「ふうん、なるほどね。必要なのは実践だけか」

「はい。ですから学校に頼りますと非効率かと思ひまして」

なるほど、黒麗星はそれもあつて、基礎からみっちりやるような『専門学校』を薦めなかったのか。と、得心するルナ。

というか六神丸は最初にこれも話しておくべきだったんじゃないだろうか。

「ふむ」

「あの、ルナさん。もしかして……………」

「……………ま、あんたも真剣なようだし、いいさ。ひとまず弟子（仮）として。言つとくけど給料とかは出ないよ。生活費は自分で稼い

でくれ
「！」

六神丸は思わず立ち上がってルナの手を取った。なんだか弟子の後ろに余計な括弧が付いている気もするが、そんなことは喜びの前では些細なことである。

「ありがとうございます、ルナさん！正直ちょっと諦めてました！」
「あんたちゃんと聞いてたかい？（仮）の上に、生活費は出ないよ」
「そこは期待してません！ありがとうございます、ええと……お師匠様と呼ばば？」

「何気にひどいね。背が痒くなるからルナにしといてくれ」

「分かりました！」

マスター
「主様に何してるんですか」

恋々が笑顔で空の湯飲みを投げつける。

六神丸はルナから手を離し、それを軽い動作で受け止めた。そして離してから、少女の手を握ってしまっていたことに気づく。

「あ」

いつの間にやら戻ってきていた恋々が、花のような笑顔のまま、腕を組み仁王立ちで怒りを表している。

「まったく、そんな力いっぱい握り締めるなんて。主様の繊細な手
マスター
が変形したらどう責任を取るつもりですかあなたは」

「あわわすみませんルナさん！喜びのあまりつい貴方に失礼を」
「……ま、いいけどね」

すがすがしいほど彼に下心は見えなかったのだから、ルナにはどう

でもいい事だった。

六神丸より湯飲みを回収した恋々が、急須で新しいお茶を注いでいく。それが紅茶ではなく緑茶なのは、砂糖で変な味付けをされてしまわないためか。

「恋々、彼をうちに置くことにしたから。……………一応」
「ご随意に」

恭しく頭を下げる恋々は、先ほどの姿が嘘のように柔らかな物腰だった。そして流れるように、主と青年の前に湯気を立てる湯飲みを差し出す。

しかし一番驚いたのは六神丸である。

「うちに置くて……………まさか私ここに住むんですか？」

「弟子入りつつたら、そんなもんじゃないのかい？ 飯とはいえ。あたしや、黒麗星の例しか知らないからねえ」

「でも……………その、女所帯に男一人っていうのは拙いのでは」

「その辺りは心配しておりませんわ、六神丸さん。貴方は誠実そうですし、問題ありません」

「れ、恋々さん、会って一日でその判断は早計では」

「だって主様の手を握っていたのに気づいても、一切赤面しなかった体たらくですもの。全然女性への興味が見えませんでした。ものすごく安全です」

「……………だ、そうだよ六神丸」

「……………」

妙な太鼓判を押された六神丸は、反論する言葉を搜して固まる。ここは信用されたと喜ぶべきか、男と思われていないと嘆くべきか。

「ああ、それとも家を離れられない事情があるのかい？」

「あ、いえ、それはありませんが……………」

「ならいいじゃないか」

「決まりですね」

「え、ええと……………はい。あ、あはは……………」

息の合った主従になぜか押し切られる形となった六神丸は、着物の袖で口元を隠し苦笑する。

ルナは背もたれに深く寄りかかり、火傷をしそうなほどに熱い新緑の湯のみを両手で包み持つ。熱を感じないのか何か術でも掛けているのか、水面に息を吹きかけている彼女は平然としている。

「六神丸、次にくる仕事にあんたを随伴させて、素質があるかどうかを計る。（仮）が取っ払えるかはあんた次第だよ。いいね」

「はい。ご指導よろしくお願いいたしますね、ルナさん！」

何はともあれ、この少女から譲歩を引き出せたのだ。

と、気を取り直した六神丸は、これから忙しくなりそうな日々を思つて、やんわりと微笑んだ。

1・5 彼と彼の舞台裏

ああ、この第22層の賑やかさをなんといい表せばいいだろうか。

ここは昼も夜も関係なく、喧しくも活気に満ち満ちていて、まるで毎日が宴会のようだ。

原色が目にも鮮やかな歓楽街で、一人の青年がさざめく人波に身を任せ漂っていく。

いや人の波と言うより、人の洪水と言った方が的確であろう。

全方位を覆い尽くす、人、人、人。

青年は徒歩であるが、空中を飛んで店を物色する者も多い。彼らは洗濯物のように大量に垂れ下がる看板を器用に避けて、異質な人の流れを作っている。

人のごったがえすここでは通行規制も厳しく、飛ぶ速度は歩くのと大差はないが。

寄ってらっしゃい見てらっしゃいと元気よく手招くお姉さんに、青年 六神丸は笑顔で軽く断りながらも、もうだめかも、と内心困り果てているのだった。

(うつ……………人に酔った……………)

昔から人ごみが苦手な六神丸にとって、嫌がらせのような空間なのである。

どこを見ても様々な人種・種族でごちゃごちゃとしていて、その隙間を縫うのも一苦労というものだ。

宝石箱をひっくり返したようなイルミネーションが果てまで続き、美味しそうな点心の甘ったるい匂いや、威勢のいい客寄せの声がひっきりなしに飛び交う　そんなあらゆる情報が六神丸の脳をかき混ぜて、いつそう人酔いに拍車をかけている。

あくまでその喧騒を眺めている分には楽しめるのだが、自分がその最中にいるのでは話は別だ。

積層型空中都市『トウリ天』第22層。

享樂施設がどの層よりも多く充実していることで有名な層である。量よりも質とは言うけれど、ここに限っては量もあれば質も一流ということ、上層からわざわざ足を運ぶ者も多い。

この層は少し特殊で、代わり映えのしない日常を忘れさせ、心ゆくまで一時の夢に浸ってもらう演出の一環として、擬似太陽が存在しない常夜の層ジョーナイトとなっている。

「はあ……、何度来てもここは慣れませんね。どうしてここを通らねばたどり着けない構造になっているんでしょう……」

六神丸は誰に聞かせるでもなく嘆く。

彼が歩むのは中央街の一角で、そこは居酒屋が密集しているため、訪れる客の年齢層も比較的高めである。

人々はわいわいと騒いで、日々の鬱屈を発散しようと躍起になっている。

人の流れに押し出され裏路地にも入ってしまうと大変だと、気持ち悪さを堪えながらも彼は足を止めない。

この不夜城は明かりなど持たなくても、看板だの店の窓から漏れる光だので、昼のように明るく不便はない。

しかしちよつとでも主街道をそれると、薄暗い路地に迷い込んでしまったら、犯罪すれすれの怪しげな店が手をこまねいていたりするので、まったくもって気が抜けないのだ。

ちなみに六神丸は酔っ払いに絡まれるままヤバい店に連れ込まれかけたことがある。ぜひとも忘れてしまいたい。

やがて盛況な飲食店は数を減らし、それに代わって落ち着いた店構えがポツリポツリと顔を見せ始める。

うっかり裏路地に入ってしまったわけではなく、中央街の終わりに程近いためである。

第22層は大きな中央街を中心に、1から16番街が放射状につながっている構造になっているのだ。

<8番街>と太くどつしりと書かれた巨大なアーチを頭上に認めて、六神丸はホッと息をつく。

すでに喧騒は遠くなり、祭りの後のような独特の静けさが胸焼けをなだめる。

けばけばしい色彩は鳴りをひそめ、鬼灯ほおずきのような紅の提燈ちようちんが連なり人々を誘う、妖しくも美しい造りの通りだ。

アーチを潜り抜けてしばらく、目的の店がやっとその姿を見せた。麝香人形堂に限らず、多文化的な建築物の多い『トウリ天』において、その屋敷も例外ではなかった。

中華色の強い装飾でありながら、造りは貴族の住まうような洋館とでも言おうか。看板もなければ営業しているのかも分からない、一見様お断りとありありと分かる店だ。

ここが、ルナの師匠である黒麗星ヘイリシンの営む、多くの占い師を抱える『タオユアンロウ桃源楼』である。

六神丸は躊躇ない足取りで店の裏に回る。

麝香人形堂に住まうことが決まり、諸事情で世話になっていた黒麗星にことの次第を告げるために訪れたのだ。

すると、彼の来訪が分かっていたかのようなタイミングで裏門が開いた。

現れたのは雪の精と見まごうような髪から足先まで真っ白の少女だ。

「お帰りなさいませ、六神丸様」

「エレンさん、ただいま。黒麗星さんに取り次いで貰えます?」

「はい。すでに甲きのえの間にて、兄様がお待ちです」

「………… お見通しですか。やはり彼はさすがですねえ」

「兄様に分からないことなんて………… あんまりないですね。乙女心以外は」

六神丸は苦笑してその少女の小さな頭を撫でた。

少女は兄が大好きなのに、いつも軽くあしらわれてしまうことが不

満なのだろう。

「もう、六神丸様。子ども扱いしないでいただけませんか？」

「いえいえ、そんなつもりはないですよ。ただなんとなく微笑ましいなあと」

「それを子ども扱いと言っんですっ」

「あははー」

「もう。……着きましたわよ、六神丸様。中に茶器を用意して置きましたのでお願いしますね」

「忙しいでしょうにすみません」

「これぐらいどうってことありませんわ！それでは仕事がありますので、これで失礼いたしますね」

「ええ、頑張つて」

少女 エレンもこの桃源楼に所属する占い師であり、黒麗星の弟子である。ゆえにルナの姉弟子であるはずだが、エレンから彼女の話を聞いたことはない。六神丸が桃源楼に来たのはつい最近であるので、話題に出す機会がなかったかもしれない。

とりとめのないことを考えながら、六神丸は甲の間の扉を開けた。

「おう六神丸。首尾はどうだった」

彼を迎えたのは山賊の親分が子分へ掛けるような台詞だった。

その言い様に肩を落とした六神丸は、ため息を着いてこめかみを押さえる。

「あのですね。私が悪巧みしているような言い方しないでくださいよ」

「そう違いはないと思うがね。けけ、嘘つきめ」
「う」

『嘘つき』に思い当たる節のありまくる六神丸は、少し彼から目線を逸らす。

そんな六神丸を見て人の悪そうに笑う男 ヘイリーシン 黒麗星は、山賊とは真逆の優美な雰囲気を纏っていた。

レースのヴェールが彼の後頭部から腰までを覆い、細身の長袍はチャンドレスと紙一重のデザインで、それらすべてが夜闇のような混じりけのない漆黒で統一されている。

彼の髪もまた漆黒であるが、夜空で自己を主張する月の様に、瞳だけは鮮烈な青の輝きを宿している。

しかしその若い姿に惑わされてはいけけない。彼はトウリ天においても最古参の一人で、旧世界 少なくとも1300年ほど前から生きていると云うとんでもない仙人である。

「は、別に怒っちゃいねえよ。ルナの奴が簡単にはぐらかされねえこた分かってる。いいからそこ閉めて、とつとと座れ」
「あ、はい」

六神丸は突っ立ったままで話していたことに気づき、後ろ手で扉を閉める。

黒麗星は座れと言ったが、この狭い部屋には椅子はなく、艶やかな絞り染めの敷き布が数枚広げられているだけだ。

部屋には龍の重そうな置物やら、見返る幽霊の描かれた掛け軸やら、星座の記された占いの道具やらが秩序だって散乱し、いかにも胡散臭い様相を呈している。

ここは黒麗星の私物で溢れかえっていて、片付けようと言う意思がまったく見えない部屋である。

六神丸はもう慣れたもので、黒麗星が寝転がる目の前にそこらの適当な座布団を引き寄せ正座する。

そして漆黒の麗人の傍らに揃えられた、美しい白磁の中国茶器に気づく。

手をつけられた様子も手をつける様子もまるでない。

（ああ、やっぱり……。まあこの黒麗星^{ものぐさ}が淹れてくれたりなんかしたら、天変地異の前触れですよな）

六神丸はそれを手繰り寄せ、手早く茶を淹れる用意をする。この華奢な茶器はいかにもエレンの好みだな、と蓋^{がい}碗^{わん}に湯を注いで温めながら考える。

彼の淀みのない手つきを眺める黒麗星は、高価そうなクッションにもたれ掛かり、漆塗りの煙管を燻^{くゆ}らせている。

「それで？」

「はい。どうせ“知って”いるんでしょうが、一応報告にあがりました」

「おう」

「とりあえずの目的は果たしました。ご助力感謝いたします、黒麗^{ヘイリー}星^{シン}」

六神丸は花茶を蒸らす片手間、微かに頭を下げて礼をする。

黒麗星は礼儀にはうるさいくせに、畏まった事が苦手という面倒な性質^{たち}なので、彼への対応はこれぐらいでちょうどいい。要は誠意が伝わればいいのだ。

「無事ルナさんと再会^{さいかい}できました。弟子入りすることに成功いたしましたので、麝香人形堂でしばらく厄介になることになります。弟

子入りは正しくは仮ですが。それから………あなたの名前を勝手に使ってしまったて申し訳ありませんでした」

六神丸はルナと対面したとき『初めまして』とは言わなかった。さらに黒麗星にはルナの現住所を教えて貰っただけで、弟子入りするよう頼まれてなどいない。

あのままではルナの承諾を貰えそうに無かったので、彼のいかにも言いそうなことを口からでまかせで並べてしまったのだ。

「ふん、別に怒ってないつつたろ。第一お前にあいつを丸投げすることに変わりはないねえしな。そのために教えたんだ」

「……………恩に着ます」

「着るな着るな、うつとおしい。むしろそんぐらいの融通も利かないうような馬鹿になんぞ任せたくねえよ」

「はい。……………ふふ、あなたらしい」

六神丸は微笑んで、花茶を注ぎ終わった飲杯を差し出す。

黒麗星は胡坐をかいて、六神丸から受け取った茶を行儀悪くする。そのぞんざいな態度はおそらく照れ隠しだろう。

六神丸も茶の香りを確かめてから口をつける。この爽やかな香りとさっぱりした風味は茉莉花茶ジャスミンティーであろうか。

夜気に少し冷えていた身体がほっこりと温まる。

しばらく無言のままゆっくりとした時間が流れる。

黒麗星の何気ない目線がこちらを探るかのようだったので、六神丸は動じず茶を楽しんでいるそぶりを続けた。

この茶が美味しいのも本当だが。

やがて黒麗星がポツリとつぶやく。

「…………弟子入り、か」

「色々考慮した結果、近くにいるにはそれが一番いいかと思いつて」

「ふむ……………」

黒麗星は飲み干した器を床に置いて口を開く。

「六神丸」

「はい」

「俺は生業^{なりわい}としてもただの趣味としても未来^{さき}を視ることが多いが」
「悪趣味ですよね」

「…………俺がか？顧客がか？まあ否定はせんが」

「…………多くを知ることとは、必ずしも幸福に繋がる訳ではありません
ん」

「それも否定しない」

言いながら黒麗星は、煙管に新しい刻み煙草を詰めている。重要なことを話しながらも、話の内容などどうでもよさそうな態度だ。

「未来なんてな大概漠然としたものだ。明日や明後日ぐらいに近い時間なら、ま、はつきり視れたりもするが。数年先で輪郭がつかめる程度、数百年先なんざ俺にも視れん。人がどんなに目を凝らそうと、視力の許す限りの光景しか見えないのと同じでな」

「もし見えていたなら…………百年前のようなことは阻止できたのですか」

「…………さあな」

黒麗星は煙管を銜え、一つ指を鳴らして先に火を灯す。

彼の有閑で気だるげなしぐさは、弟子であるルナとやはり似通っている。

「そして常に未来はその姿を変えていく。数百年後の^{「じつは」}街並みが今と同じでは無いように」

「……つまり、私のこの行動が吉と出るか凶と出るかは、貴方にも分からないということですか？」

「そういつこつた。……ただ」

彼は一つ、億劫そうに紫煙を吐く。

「街並みを作り変えていくのは人の意思だ。俺ら占い師に出来るのは、どこそこに何を建てれば住みやすい街になるのか助言することぐらいだね」

「はい」

「もし自身の選択が信じられなくなったら訪ねて来い。ケツ引つばたいて方角教えるぐらいはしてやるよ」

「ありがとうございます」

につこりと微笑んだ六神丸に、黒麗星はもう用はないとばかりに、しゅしゅと手を振って追い払う仕草をする。

「ほれ、分かったらとつと荷物まとめて出て行け」

「私は犬じゃないんですから……」

六神丸は呆れながらも不快そうではない。彼は退室すべく、茶器を綺麗にまとめて立ち上がる。

「あ、そうそう。皆さんの食事は作っていきますので、その後に失礼させていただくつもりです」

黒麗星は言葉では答えず、煙管を口にしたまま手をひらひらと振っ

て返す。

その素っ気無さには苦笑するしかない。

六神丸自身の持ち物はさほど多くないので荷造りに時間はかからないだろう。しかし夕飯作りと桃源楼で世話になった人たちへの挨拶にはそこそこ時間がかかるだろうか。

と彼は算段をつけて、扉へと手をかけ振り返る。

「ええと、こういう時はなんて言うんでしたっけ。………」
『実家に帰らせていただきます』？」

カシャン！……… からから。

「それではお世話になりました黒麗星」

六神丸はにこやかに、盛大に間違えた台詞を言うだけ言って退室する。

黒麗星の煙管を取り落としたらしい乾いた音は聞こえなかったことにした。

1・5 彼と彼の舞台裏（後書き）

正確には第一話がゼロ話で、この1・5話が0・5話という位置づけでしょうか。

次からやつと麿香人形堂で起こる騒動の連作に入ります。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、たんのう堪能してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n9692e/>

麝香人形堂

2010年10月8日21時50分発行